

釜の下の灰坊・仁多郡奥出雲町大呂

令和3年11月23日

収録・解説・酒井 董美

ただよし

イラスト・福本 隆男

語り手 安部イトさん（明治27年生まれ）
収録・昭和45年4月26日

あらすじ

昔、山子（樵夫）の家の池に毎日娘が三人来て、水浴びで騒ぎ山子は昼寝ができない。そこで山子は着物が一枚隠した。娘たちは水から上がったが一人の娘の着物がない。山子は「捜してあげるから、ぼくの嫁になってくれ」と言ったら、「嫁になるから捜しておくれ」と言う。山子は着物を出したげな。娘は「私は天のものだから、おまえが天に上がって来たら嫁になるから。この豆を植えて大きく長くなったら、豆の木につかまって上がって来るように。そうしたら嫁になる」

山子はその豆を植えて肥やしをやり、天に届いたようなので、それからつかまっ上がつたそうなら、天は広いもんだそうですね。それから、天へ上がつてりっぱなお宅へ入って下男をさしてもらえばそのうち娘さんに会われるだろうと思いい頼んだところ釜の下のへイボウ（灰坊）に使ってもらおう。

ある日、お嬢さんがへイボウの顔を見たあ、具合が悪くなつた。八卦見に診てもらったら、「この家で目についた人があつて、それと盃して夫婦になれば治ること言う。

それから、みなの者に風呂に入らして、いいこしらえやご馳走して、ずうっと並んでいると、お嬢さんが盃を渡した者が婿になるというので、それから、出てじろじろ見ていたが、だれにも盃をやらずに引つ込んでしまった。

まだへイボウがいるというので風呂に入つて、いい着物を着て座つたげそうなら、そうしたら、嬢さんが、本当にへイボウに盃渡して、酒ついたので、その若旦那になつた。それから、川の向こうのナスビ取りに婿が行かねばならない。行くときに嫁さんが、「二つ取つてはいけないうよ、一つだけでない」と大水が出て帰られなくなるから」と言つたそうなら、婿が。

「二つ取つてやれ」と二つ取つたら、川に大水が出て帰れなくなつた。

嫁の嬢さんが川の向こうから、「一年に一度会おうよ」と言つたので、一年に一度会うことになつた。それが七夕さん

だ。昔（つばし）。

解説

『日本昔話通観』から「天人女房」を見ると次のようである。

①男が水浴をしている天女たちの羽衣の一つを隠すと、一人の天女が昇天できず、男の嫁になって子を生む。

②妻は子に教えられて羽衣を見つげ、瓜の種を残し、瓜の蔓を伝つて天に昇つて、「い」と書き残して天に帰る。

③夫が言われたとおりにして天に昇ると、いやがつた妻の親が畑仕事の難題をつぎつぎに出すが、すべて妻の助言で課題をしとげる。

④親に瓜畑の番をさせられた夫が、妻の警告にもかかわらず瓜を縦切りにして食うと、あふれ出た大水で川むこうへ流される。

⑤妻が、七日ごとに会おう、と言うが、夫はそれを七月七日と聞き違え、二人はその日しか会えなくなる。

安部さんの話は、まさに大枠でこの「天人女房」の話であり、話の途中に「灰坊」タイプの子供の部分が挿入されているという複合型であると考えられる。

（元島根大学法文学部教授）

